

## 道南地域における水稲高密度播種短期育苗の先駆者

森 隆志(北斗市)



森 隆志さん

### 【組織等の概要】

- 経営形態：水稲(17.3ha)、施設園芸(ビニールハウス12棟)の複合経営
- 栽培品目：米、軟白ねぎ、キャベツ、トマト、はくさい(露地トンネル)、みつば、長ねぎ
- 労働力：本人、家族(妻、長男)、種もみ播種期間のみ、アルバイト2名を雇用

### ◇【取組の経緯と概要】

- ◆ 2017年、農機具メーカーから高密度播種短期育苗の協力依頼があり、25aで試験栽培を実施。
- ◆ 2018年、専用田植機を導入。栽培面積を3haに拡大し、慣行栽培(14.3ha)の両方に取り組む。
- ◆ 2019年、慣行栽培と比較し、収量・品質ともに遜色がないことから、全面積(17.3ha)で導入し、現在に至る。

※「高密度播種短期育苗」とは、①育苗箱への播種量を増やし、②短い育苗日数で移植する栽培方法。森さんは、播種量を約3倍、育苗日数を約18日間(約4割減)として栽培。

### ◇【高密度播種短期育苗にあたっての対処事項】

- ◆ 苗の冠水防止について  
⇒ 田植時の苗の長さが10~12cmであることから、水田の代かき(2回)を丁寧に行うことで均平化を図り、田植え前日の水切り作業、田植後は浮き苗防止のため、極浅水管理(1~2cm)を実施。
- ◆ 水田の土質(灰色低地土、泥炭土)対策について  
⇒ 排水性向上を意識した土づくり、秋起こし、春の心土破碎を実施することで、ほ場の乾田化に努める。
- ◆ 老化苗防止について  
⇒ 発芽14日目まで田植を開始できるように、田植作業を逆算した種もみ播種で老化苗発生を防止。



高密度播種短期育苗の苗



田植作業の様子

### 【取組の成果】

- 全面積に高密度播種短期育苗を導入したことで、育苗ハウスが慣行栽培の半分(7棟⇒3棟半)に減少し、空いたハウスで軟白ねぎを栽培し所得向上につながった。
- 育苗箱、培土の使用量が半分に減少したことにより、田植時の苗運びや苗補給回数が半分以上に減少し、資材費、労働力を軽減することができた。
- 田植が慣行栽培では1日あたり2haであったが、4haになり、日数が短縮した分の労働力を軟白ねぎの収穫や長ねぎの定植、露地はくさいの定植など園芸作物の作業に充てることができた。
- 施肥は田植時の側条施肥のみとし、春の本田施肥作業を省力化し、園芸作物に労働力を振り分けることができた。

### 【今後の展望】

- 2023年から、ドローンを利用した農薬防除を導入予定。省力化できた時間を園芸作物の栽培に充てることで、さらに所得向上を目指す。
- 全面積を高密度播種短期育苗に切り替えたことで、育苗ハウスに空きができたので、地域で水田を貸してくれる方がいれば、さらに作付面積を拡大したい。